

中国初期禅宗史の研究

——南北二宗の歴史・文献・思想をめぐって——

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程

4120170002 通 然

本論が研究の対象とするのは「初期禅宗」である。当面、「初期禅宗」とは「中国において南北朝時代(439-589)にインドからやってきた菩提達摩の活動を出発点として、その後、約三百余年にわたって馬祖禅の成立(八世紀後半)までに展開した禅宗各派である」と仮に定義して、研究を始めることにしたい。

近代における禅研究の最大の成果は、敦煌文書等の新出文献の発見や紹介によって、従来、禅宗の中で常識とされていた歴史や思想が覆されたという点である。すなわち、慧能一馬祖・石頭系(五家七宗)が後世禅宗の主流となる以前、禅宗初期においては、法如系、慧安系、神秀一普寂系(北宗)、慧能一神会系(南宗・荷沢宗)、法持系(牛頭宗)、智詵系(浄衆宗・保唐宗)等、様々な主張を持つ各派がかつて存在して覇権を争っていたのである。それ以前、中国禅宗史を研究する際に重んじられてきた資料としては、道宣(596-667)の『続高僧伝』、賛寧(919-1001)の『宋高僧伝』、道原(生没年未詳)の『景德伝燈録』等の伝世資料があったが、『続高僧伝』と『宋高僧伝』はその名の示す通り、各時代に活躍した高僧の伝記を編集するのが主目的で、禅宗史を述べようとしたものではない。また、この両書の成立は、それぞれちょうど上述の禅宗各派が成立する以前と衰退した後の時期に当たっているため、各派の生々しい実態を伝える記載が少ない。さらに、『景德伝燈録』等は馬祖や石頭の二派が主流となった後に、史実としての禅宗史を隠蔽し、自らを権威づけようとするところに成立したものであり、客観的な禅宗史を記述したものではないのである。これに対して、敦煌文書中に見出された禅文献は、正しく『続高僧伝』(645年、667年まで増補)の成立した七世紀中期から、『宋高僧伝』(988年)や『景德伝燈録』(1004年)の成立した十世紀末・十一世紀初頭に至るおよそ三百余年の空白を埋める禅宗の歴史や思想を補う直接資料である。禅研究にとって、敦煌禅籍の最大の意義と価値はこの点にあり、その果たし得る役割も極めて大なるものがあると言えよう。

このように、敦煌禅籍に基づく中国初期禅宗史の研究は、この分野の最重要課題として膨大な先学の蓄積があるが、しかし、残された課題は多い。例えば、これら各派の歴史と思想を伝える根本資料についても、「諸本の収集や整理」、「成立や流布の状況」、「思想の解明」等は、いまだ必ずしも十分には行われていないのである。しかも、日本の諸寺院や各文庫に秘蔵された資料の公開などに伴い、従来知られている文献についても、いよいよ再検討の必要性が高まっていると言える。従って、本論が意図するところは、その題目に示されているように、初期禅宗を代表する二派「北宗」と「南宗」を中心に、その歴史・文献・思想をめぐる未解決の諸問題を解明することにある。

本論の構成は、以下の通りである。

第一部 研究篇

序論

第一節 初期禅宗の研究史

- 一 近代的な禅宗研究の開始
- 二 敦煌禅籍紹介以降の研究

第二節 本論の課題と方法

第三節 本論の構成と概要

第一章 南北二宗の形成と対立

第一節 初期禅宗諸派の呼称について

- 一 問題の所在
- 二 宗密著作にみる禅宗各派の呼称と分類
- 三 宗密以外の文献にみる禅宗各派の認識
- 四 小結

第二節 普寂の布教活動とその影響

- 一 問題の所在
- 二 普寂と嵩岳寺
- 三 嵩岳寺における普寂の開法
- 四 敬愛寺と興唐寺における普寂の開法
- 五 小結

第三節 神会の布教活動とその影響

- 一 問題の所在
- 二 神会の生涯
- 三 南陽竜興寺における神会の開法
- 四 洛陽荷沢寺における神会の開法
- 五 小結

第二章 禅宗灯史の出現と主張

第一節 杜拙撰『伝法宝記』の再検討

- 一 問題の所在
- 二 撰者「杜拙」について
- 三 『伝法宝紀』の祖統説
- 四 法如派と『伝法宝紀』
- 五 小結

第二節 浄覚集『楞伽師資記』の依用文献

- 一 問題の所在
- 二 『楞伽師資記』の構成とその特徴
- 三 『楞伽師資記』における先行文献の引用
- 四 道信と『大乘入道安心法門』(擬)の関係
- 五 小結

第三節 石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』の出現

- 一 問題の所在
- 二 『跋陀三蔵安心法』の形態と内容
- 三 『跋陀三蔵安心法』と関連する文献との対照
- 四 『跋陀三蔵安心法』と『楞伽師資記』との前後関係
- 五 『跋陀三蔵安心法』の成立について
- 六 『跋陀三蔵安心法』の流布とその影響
- 七 「誌公和尚十四科頌」と宝誌
- 八 小結

第四節 『師資血脈伝』と荷沢神会

- 一 問題の所在
- 二 『師資血脈伝』と『定是非論』との相互関係
- 三 『金剛経』の伝授に関する記述
- 四 小結

第三章 禅文献の成立と流布

第一節 『観心論』の成立について

- 一 問題の所在
- 二 『観心論』の撰者
- 三 『観心論』の成立背景
- 四 小結

第二節 中日韓所伝『観心論』諸本の関係

- 一 問題の所在
- 二 『観心論』の諸本とその内容
- 三 敦煌諸本の関係
- 四 敦煌本と日本・朝鮮伝本の関係
- 五 小結

第三節 日本所伝『破相論』諸本の関係

- 一 問題の所在
- 二 『破相論』の諸本とその内容
- 三 金沢文庫両写本と真福寺文庫本
- 四 五山版『達磨大師三論』本と金沢文庫本
- 五 五山版『少室六門』本と日本所伝諸本
- 六 小結

第四節 『達磨大師悟性論』の思想的特徴

- 一 問題の所在
- 二 『悟性論』と『二入四行論長卷子』との関連
- 三 『悟性論』と『観心論』との関連
- 三 『悟性論』の成立について
- 四 小結

第五節 『南陽和尚問答雜徴義』諸本の関係

- 一 問題の所在
- 二 『問答雜徴義』の諸本とその構成
- 三 『問答雜徴義』諸本の関係
- 四 『問答雜徴義』の成立について
- 五 小結

結論

第二部 資料篇

資料一 金沢文庫残欠本『破相論』の翻刻

資料二 日本所伝『破相論』の諸本対校

資料三 朝鮮所伝『観心論』の諸本対校

資料四 石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』の翻刻と対校

序章では、初期禅宗の研究史とその課題、および本論の構成について述べた。

第一章第一節「初期禅宗諸派の呼称について」では、八世紀から九世紀にかけての時期の禅宗各派の呼称について考察した。その結果、南宗と北宗の呼称は、神会の普寂系批判に由来するものであるが、浄衆宗、保唐宗、南山念仏禅門、牛頭宗、並びに南宗中の荷沢宗、洪州宗、石頭宗の呼称は、すべて宗密によって名付けられたものであることが明らかになった。また、南北二宗の対立の影響を受けて、牛頭宗と南北二宗の対立、荷沢宗と洪州宗の対立などが顕在化した。各文献に見られる各派呼称の相違は、これと密接な関係が認められる。そのため、近代の禅宗史研究では、禅宗各派の呼称と分類について種々な混乱が認められる。従って、筆者は歴史的な呼称(すなわち宗密の呼称と分類)を尊重、継承した上で、祖師の名前(例えば、北宗の場合＝神秀派、あるいは神秀—普寂系)を各派の呼称として使用することを提言した。

第二節「普寂の布教活動とその影響」では、北宗の大成者である大照普寂(651-739)の活動を「嵩岳寺期」と「敬愛寺・興唐寺期」に分けて考察し、前者は出家者、後者は在家者を中心に教化したことを指摘した。また、普寂は嵩岳寺を自派の布教の拠点とし、多くの優れた出家の弟子を育てることによって、北宗禅が中国本土のみならず、日本や朝鮮半島にも伝えられた。さらに、普寂は晩年になると、敬愛寺や興唐寺を中心に活躍し、『大乘無生方便門』と『観心論』を用いて開法を行ったが、これらの著作には、当時の社会や仏教界に生じていた種々の弊害を批判した記述が見られる。これは貴族仏教の弊害を批判しつつ、財力のない一般的な在家信者に禅実践の方法を提起したと結論した。

第三節「神会の布教活動とその影響」では、南宗の急先鋒である荷沢神会(684-758)の布教活動を「南陽竜興寺時代」と「洛陽荷沢寺時代」に分けて分析し、前者は多くの文人や士大夫などの在家者と親交を持ち、後者は多くの出家の弟子に指導を行ったと指摘した。また、こうした行歴は、当時、慧能系は南方地域を中心に活動していたから、普寂系の影響が強い中原地域では勢力を持たず、経験の浅い神会は、開法の初期には多くの出家者たちを集めることができなかつたためであると考えられる。さらに、神会は開法を行う際に普寂系の「授菩薩戒儀」の方法をそのまま取り入れており、『壇語』に示される普寂系を批判する概念も、『大乘無生方便門』を土台として構築されたものであることから、神会自身も普寂系の影響を強く受けていたことが認められる。

第二章第一節「杜拙撰『伝法宝記』の再検討」では、神会が批判対象の一つとした『伝法宝記』について、この文献の成立や性格等の考察を試みた。その結果、『伝法宝記』は神会が言う北宗でも南宗でもなく、初期禅宗における独自の一派である「法如派」の伝承を伝えるものであると論じた。また、『伝法宝記』が法如と神秀の二人を立伝するのは、法如の弟子の中には法如と神秀の双方を尊敬する人が多く存在したことや、当時の神秀—普

寂系が大きな勢力を持っていたこと等と関係するものであると考えられる。さらに、『伝法宝紀』では法如を五祖弘忍の正嫡とし、神秀以上の地位が与られていたことから、『伝法宝紀』の撰述は、法如への崇敬の念がいっそう深かった杜朮や元珪、恵超などを中心に行われたと推定される。

第二節「浄覚集『楞伽師資記』の依用文献」では、新出の滋賀県・石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』を手掛かりに、『伝法宝紀』と並ぶ現存最古の禅宗史書である『楞伽師資記』の依用文献について考察し、禅思想史研究における本書の資料価値を論じた。その結果、『楞伽師資記』の各章(「達摩章」を除く)に述べられている思想は、当該祖師たちのものではなく、撰者浄覚の作為によって種々の先行文献を借用した上で、多くの経論を教証として取り入れて再編集したものであると考えられる。特に、浄覚が中心に置く「道信章」に言及される『入道安心要方便法門』(擬)はその信憑性が極めて低く、それに基づいて道信の思想を考えることには多くの危険が伴うことを指摘した。

第三節「石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』の出現」では、滋賀県・石山寺に所蔵される天下の孤本、『跋陀三蔵安心法』を紹介するとともに『楞伽師資記』との関係と論じ、この文献の性格や初期禅宗史における意義を解明した。すなわち、『跋陀三蔵安心法』は「跋陀三蔵安心法」と「誌公和尚十四科頌」の二部分によりなり、前者は『楞伽師資記』「求那跋陀羅章」と共通する内容を持ち、後者は『景德伝灯録』、『宗門聯灯会要』、『禅門諸祖師偈頌』に見られるものと同一のものである。「跋陀三蔵安心法」は「求那跋陀羅章」の原資料として先行成立し、その作者は仏陀禅師(跋陀)、あるいは僧稠系統の人であると考えられるが、楞伽主義を宣揚した浄覚は『楞伽経』の訳者、求那跋陀羅を禅宗の初祖とされる菩提達摩の前に据えて、「跋陀三蔵安心法」を達摩の思想の根拠とするために、跋陀三蔵(仏陀禅師)を求那跋陀羅に改変したのである。「誌公和尚十四科頌」は現存諸本の中で最古のものであり、他の宝誌を作者とする作品とともに、唐の中晩期に出現してから、しばしば禅文献に引用されていた。その理由は禅宗各派の人々が禅の立場を強調するため、宝誌の影響力を借りようとしたのであろうと考えられる。

第四節『師資血脈伝』と荷沢神会」では、神会系の灯史とされる『師資血脈伝』の成立と流布について考察した。その結果、現在、石井本『神会録』の末尾に付されている「六代の伝記」は、独孤沛が『定是非論』の冒頭部分に言及した『師資血脈伝』そのものではなく、そこに略抄したものであると見てよい。また、「六代の伝記」に見られる『金剛経』宣揚に関する部分が後代の付加であることが認められるが、神会の思想には決して『金剛経』を重視していなかったと考えられる。

第三章第一節『観心論』の成立について」では、普寂系の綱要書とされる『観心論』を先ず取り上げ、当時の社会状況と仏教界を支えた主流思想に注目し、従来ほとんど考慮

されてこなかった新たな側面からその成立を論じた。その結果、『観心論』は神秀とその弟子たちが中原へ進出する際に、当時の社会に生じた種々の弊害を背景として成立したと考えられる。その思想内容の面では、当時の教学思潮の強い影響が窺える。すなわち、『観心論』は『大乘起信論』の「一心二門」思想に基づき、浄心と染心とに分けており、三毒心や六根不浄を輪廻の根源として、東山法門以来の修行法「観心」を三聚浄戒や六波羅蜜という「菩薩戒」思想と結合し、新たな修行法を唱えた。

第二節「中日韓所伝『観心論』諸本の関係」では、敦煌本や日本・朝鮮伝本『観心論』の諸本を整理し、これらを厳密に対校、分析することによって、従来研究されていなかった日中韓の諸本間の関係を解明した。すなわち、敦煌本の七種は、A系統(S2595、P4646、S5532)、B系統(P2460V、龍谷大学本)、C系統(P2657V、S646)の三つに分けることができる。また、A系統のS2595は最も古く原型に近いものであり、B系統はA系統より後の時期に成立したものであり、「達摩作」と見なされて伝持されていた可能性が強く、C系統は最後期に成立したものであると考えられる。さらに、日本伝本と朝鮮伝本は「達摩の著作」として伝えられたことや、本文も敦煌本のB系統に近いことから、両者は密接な関係があると認められるが、日本伝本は諸本の中で、写誤、欠落した部分が多いから、良いものとは言えないことがわかる。

第三節「日本所伝『破相論』諸本の関係」では、新出の金沢文庫残欠本『破相論』を紹介するとともに、今まで知られている日本所伝諸本との間の重大な相違を指摘し、『破相論』の諸本関係や流布過程を考察した。その結果、『破相論』の六種は、錯簡がない系統(金沢文庫残欠本、五山版『達磨大師三論』本)と、錯簡がある系統(金沢文庫建仁本、金沢文庫建長本、真福寺文庫本、五山版『少室六門』本)の二つに分けることができる。その二系統の祖本は、いずれも、唐の会昌五年(845)に龔朗によって日本の和尚に与えた写本であった。錯簡がない系統のうち、五山版『達磨大師三論』本は、刊行する際に少なくとも二度に渡って本文が補正されたことが確認される。錯簡がある系統のうち、五山版『少室六門』本は、金沢文庫建仁本、建長本、真福寺文庫本の錯簡と全同ではなく、それを刊行する際に本文を補正しようとした結果、そうした違いが生じたと見ることができる。

第四節『達磨大師悟性論』の思想的特徴』では、『破相論』とともに菩提達摩撰とされる『悟性論』の文献としての性格を分析し、その思想が『二入四行論長卷子』と『観心論』を継承したものであることを論じた。すなわち、『悟性論』が「心」に対して、「有」、「無」、「非有非無」や「染」、「浄」と解釈することは、それらを前提として成立したと考えられるのである。また、『悟性論』はもともと『観心論』と連写されて日本で伝持されていたこと、北宗禅文献とされる『禅門経』の文章を引用することによって、本書を北宗禅内で編まれたものと位置付けた。

第五節「『南陽和尚問答雜徵義』諸本の関係」では、「神会語録」、あるいは「神会録」と呼ばれることのある『問答雜徵義』諸本の構成を整理し、諸本間の関係をできる限り解明した上で、本書の成立過程とその変遷を論じた。その結果、現存する『問答雜徵義』の諸本は、S6557、石井本と、胡適本(P3047)の二つの系統に分けることができる。S6557と石井本の底本は、劉澄の序文を有し、本文の内容が現在の石井本の全体に相当するが、当初、「六代の伝記」や「大乘頓教頌并序」は付されていなかったと考えられる。胡適本(P3047)の底本には、S6557や石井本と同様に『定是非論』からの引用が含まれていたが、その後、『定是非論』と連写された段階で、それと共通する部分が意図的に削除された。また、『問答雜徵義』は、神会が洛陽の荷沢寺に入ったことを契機として南陽時代の活動を中心に編集したもので、その後、継続的に増補が行われており、現存する諸本の形態になったと考えられる。

結論では、各章で明らかになった諸点を整理し、結論をまとめた。

第二部「資料篇」は、第一部の論述に関連する主要テキスト、すなわち『破相論』、『観心論』、『跋陀三蔵安心法』を取り上げて、その翻刻、対校などの作業を行った。

「資料一」は、神奈川県立金沢文庫所蔵残欠本『破相論』のテキストの翻刻である。この『破相論』のテキストには、他の日本伝本『破相論』との間で重大な相違が認められ、日本所伝諸本の関係や日本伝本と朝鮮伝本の間を解明する上で、極めて重要な意義を有する。本テキストの本文の紹介、並びにその意義の解明は筆者によって初めて行われた。

「資料二」は、現在までに知られた日本伝本『破相論』六種のテキストを対校したものである。駒沢大学図書館所蔵五山版『達磨大師三論』本『破相論』を底本として上段に翻刻し、各異本の異同を下段に注記した。

「資料三」は、現在までに知られた朝鮮伝本『観心論』六種のテキストを対校したものである。韓国のソウル大学図書館所蔵鷄林府本『観心論』を底本として上段に翻刻し、各異本の異同を下段に注記した。ここで用いた異本の多くも筆者によって初めて紹介されたものである。

「資料四」は、滋賀県大津市大本山石山寺所蔵の稀観書、『跋陀三蔵安心法』のテキストを異本と対校しつつ掲げたものである。石山寺本を底本として上段に翻刻し、異本の異同を下段に注記した。本文献は、代表的な初期禅宗史書である浄覚集『楞伽師資記』の成立やその性格を解明する上で極めて重要な意義を有するが、本書の紹介も筆者によって初めて行われたものである。

参考文献

【和文】

阿部泰郎・山崎誠

『真福寺古目録集』真福寺善本叢刊第一巻、臨川書店、1999年

穴山孝道

「伝法宝紀に就いて」、『鳴沙余韻解説』、岩波書店、1933年

石井公成

「梁武帝撰「菩提達摩碑文」の再検討(一)」、『駒沢短期大学研究紀要』28、2000年

「梁武帝撰「菩提達摩碑文」の再検討(二)」、『駒沢短期大学仏教論集』6、2000年

石井光雄

『燉煌出土神会録』、私家版、1932年

石井修道

「恵昕本『六祖壇経』の研究」、『駒沢大学仏教学部論集』11、1980年

「恵昕本『六祖壇経』の研究(続)」、『駒沢大学仏教学部論集』12、1981年

「真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』の翻刻」、『禅学研究』60、1981年

池田温

「八世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」、『ユーラシア文化研究』1、1965年

『中国古代簿帳研究』、東京大学出版会、1979年

伊藤晶

『観心論』神秀著作説の再検討、『集刊東洋学』80、1998年

石山寺文化財総合調査団

『石山寺の研究：校倉聖教・古文書篇』、法蔵館、1981年

入矢義高

『伝心法要・宛陵録』禅の語録8、筑摩書店、1969年

伊吹敦

『続高僧伝』の増広に関する研究、『東洋の思想と宗教』7、1990年

「大乘五方便」の諸本について一文献の変遷に見る北宗思想の展開、『南都仏教』65、1991年

「北宗禅の新資料—金剛蔵菩薩撰とされる「観世音経讚」と「金剛般若経註」について」、『禅文化研究所紀要』17、1991年

「法如派について」、『印度学仏教学研究』40-1、1991年

「摩訶衍と『頓悟大乘正理決』」、『論叢アジアの文化と思想』1、1992年

『頓悟真宗金剛般若修行達彼岸法門要決』と荷沢神会、三崎良周編『日本・中国仏教思想とその展開』、山喜房仏書林、1992年

『達磨大師三論』と『少室六門』の成立と流布、『論叢アジアの文化と思想』3、1994年

「慧能に帰される数種の『金剛経』の註釈書について」、『禅文化研究所紀要』22、1996年

「最澄が伝えた初期禅宗文献について」、『禅文化研究所紀要』23、1997年

「再び『心王経』の成立を論ず」、『東洋学論叢』22、1997年

「禅宗の登場と社会的反響—『浄土慈悲集』に見る北宗禅の活動とその反響」、『東洋学論叢』25、2000年

『禅の歴史』、法蔵館、2001年

「北宗禅系の『法句経疏』について」、『東洋学研究』39、2002年

「『法句経』の成立と変化について」、『仏教学』44、2002年

「『念仏鏡』に見る禅の影響」、『印度学仏教学研究』51-1、2002年

「『念仏鏡』に見る八世紀後半の禅の動向」、『東洋学論叢』28、2003年

「境野黄洋と仏教史学の形成(上)(下)」、『支那仏教精史』境野黄洋選集第一・二巻「解説」、境野黄洋研究会、2003-2004年

「『念仏三昧宝王論』に見る禅の動向」、『東洋学研究』41、2004年

「『法句経』の思想と歴史的意義」、『東洋学論叢』29、2004年

「『続高僧伝』達摩=慧可伝の形成過程について」、『印度学仏教学研究』53-1、2004年

『中国禅思想史』、『禅文化』192-226、229-232、234-235、237-248、250、252-254、禅文化研究所、2004-2019年

「『二入四行論』の成立について」、『印度学仏教学研究』55-1、2006年

「『心王経』の思想と制作者の性格」、日本敦煌学論叢編集委員会編『日本敦煌学論叢』1、比較文化研究所、2006年

「『二入四行論』の作者について—「曇林序」を中心に」、『東洋学論叢』32、2007年

「東山法門」と「楞伽宗」の成立」、『東洋学研究』44、2007年

「「戒律」から「清規」へ—北宗の禅律一致とその克服としての清規の誕生」、『日本仏教学会年報』74、2008年

「墓誌銘に見る初期の禅宗(上)(下)」、『東洋学研究』45・46、2008-2009年

「「東山法門」の人々の伝記について(上)(中)(下)」、『東洋学論叢』34・35・36、2009-2011年

「北宗における禅律一致思想の形成」、『東洋学研究』47、2010年(中国語訳：通然訳「北宗禅律一致思想的形成」『佛学研究』27、2017年)

「神秀の受戒をめぐる」、『禅文化研究所紀要』31、2011年

「道璿は本当に華嚴の祖師だったか」、『印度学仏教学研究』60-1、2011年

「「東山法門」と国家権力」、『東洋学研究』49、2012年

「『大乘五方便』の成立と展開」、『東洋学論叢』37、2012年

「道璿は天台教学に詳しかったか」、『印度学仏教学研究』61-2、2013年

「初期禅宗と日本仏教—大安寺道璿の活動とその影響」、『東洋学論叢』38、2013年

- 『異本上宮太子伝』の成立と流布、『東洋学研究』51、2014年
- 「聖徳太子慧思後身説の変化とその意味」、『東洋学研究』52、2015年
- 「奈良時代における禅宗の流布と伝教大師最澄への影響」、『叡山学院研究紀要』37、2015年
- 「日本の古文献から見た中国初期禅宗—大安寺道璿の『集註梵網經』を中心に」、『東洋思想文化』2、2015年
- 『観心論』と『修心要論』の成立とその影響、『禅学研究』94、2016年
- 『楞伽師資記』と『跋陀三蔵安心法』—その日本への将来と天台宗への影響、『東洋思想文化』4、2017年
- 「日本天台における四宗相承の成立」、『印度学仏教学研究』66-1、2017年
- 「胡適の禅研究の史的意義とその限界」、『駒沢大学仏教学部論集』49、2018年
- 「浄覚注般若波羅蜜多心經」、渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心經註釈集成：中国・日本編』、起心書房、2018年
- 『師資血脈伝』の成立と変化、並びに他の神会の著作との関係について、『東洋思想文化』7、2020年
- 「七世紀後半における中国北地の思想動向—『金剛三昧經』に見る初期禅宗と三階教の接合とその意味」、『国際禅研究』5、2020年
- 「李華撰『故左溪大師碑』に見る知識人の仏教理解」、『花野充道博士古稀記念論文集：仏教思想の展開』、2020年
- 「荷沢神会の著作『壇語』の成立時期について」、『印度学仏教学研究』69、2020年(近刊)
- 宇井伯寿
- 『禅宗史研究』、岩波書店、1935年
- 『第二禅宗史研究』、岩波書店、1941年
- 『第三禅宗史研究』、岩波書店、1943年
- 上山大峻
- 「チベット訳からみた『楞伽師資記』成立の問題点」、『印度学仏教学研究』21-2、1973年
- 『敦煌仏教の研究』、法蔵館、1990年(同書店、2012年増訂版)
- 内田誠一
- 『蕭和尚靈塔銘』の碑文について—王維・王縉兄弟との交流を物語る石刻資料の復元、『日本中国学会報』58、2006年
- 大久保道舟
- 「加賀大乘寺蔵韶州曹溪山大乗寺六祖師壇經」、『駒沢大学仏教学会学報』8、1938年
- 大屋徳城
- 「元延祐高麗刻本六祖大師法宝壇經に就いて」、『禅学研究』23、1935年
- 沖本克己
- 『楞伽師資記』の研究—蔵漢テキストの校訂および蔵文和訳1、『花園大学研究紀要』9、1978年

『楞伽師資記』の研究—藏漢テキストの校訂および藏文和訳2』、『禅文化研究所紀要』11、1979年
『沖本克己仏教学論集』第二巻・シナ編二、山喜房仏書林、2013年
尾崎正善
『神会語録』に関する一考察』、『駒沢大学仏教学部論集』21、1990年
『問答雜徴義』考』、『曹洞宗研究員研究紀要』22、1991年
小川隆
「初期禅宗形成史の一側面—普寂と「嵩山法門」」、『駒沢大学仏教学部論集』20、1989年
『神会：敦煌文献と初期の禅宗史』、臨川書店、2007年
鎌田茂雄
『宗密教学思想史研究』、東京大学出版会、1975年
『禅源諸詮集都序』禅の語録9、筑摩書店、1971年
『中国仏教史』第五巻、東京大学出版会、1994年
『中国仏教史』第六巻、東京大学出版会、1994年
神尾弑春
「観心論私考」、『宗教研究』新9-5、1932年
河合泰弘
『「大乘五方便」と神会』、『宗学研究』35、1993年
川瀬一馬
『五山版の研究』、日本古書籍商協会、1970年
川崎ミチコ
「通俗詩類・雑詩文類」、篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』、大東出版社、1980年
鏡島元隆
『金沢文庫資料全書 禅籍篇』第一巻、金沢文庫、1974年
神田喜一郎
『敦煌秘籍留真』、小林写真製版所、1935年
「伝法宝紀の完帙に就いて」、野口信二編『積翠先生華甲寿記念論纂』、同記念会、1942年
木村清孝
「日本における仏教研究の百年」、『宗教研究』78-4、2005年
久野芳隆
「流動性に富む唐代の禅宗典籍—燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品」、『宗教研究』新
14-1、1937年
「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響—敦煌出土本を中心として」、『仏教研究』3-6、1939年
「北宗禅—敦煌本発見によりて明瞭となれる神秀の思想」、『大正大学学報』30・31、1940年
孤峰智璨
『禅宗史』、光融館、1919年（大本山総持寺、1974年再版）

駒沢大学禅宗史研究会

『慧能研究：慧能の伝記と資料に関する基礎的研究』、大修館書店、1978年（臨川書店、2018年覆刻版）

訳注『宝林伝』巻一～六、巻八、駒沢大学禅宗史研究会、1980-1996年

小山昌純

「源信記『菩提心義要文』の散逸部分に関する考察—高山寺所蔵の院政期写本に基づいて」、
『印度学仏教学研究』54-2、2006年

齋藤智寛

『伝法宝紀』の精神』、『集刊東洋学』85、2001年

『楞伽師資記』考—『楞伽経』と『文殊般若経』の受容を手がかりに』、『集刊東洋学』111、2014年

境野黄洋

『支那仏教史綱』、森江書店、1907年

『支那仏教精史』、境野黄洋博士遺稿刊行会、1935年（国書刊行会、1972年再版。その後、境野黄洋研究会編『境野黄洋選集』第一・第二巻（うしお書店、2003-2004年）に収録）

佐々木憲徳

『漢魏六朝禅観発展史論』、ピタカ、1978年

佐藤哲英

「新出の源信記『菩提心義要文』の研究」、『龍谷大学仏教文化研究所紀要』7、1968年

佐野誠子

「釈宝誌識詩考」、武田時昌編『陰陽五行のサイエンス』、京都大学人文科学研究所、2011年

椎名宏雄

「嵩山における北宗禅の展開」、『宗学研究』10、1968年

「諸本対校『達磨大師三論』」、『駒沢大学仏教学部論集』8、1977年

『少室六門』と『達磨大師三論』、『駒沢大学仏教学部論集』9、1978年

「北宗灯史の成立」、篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』、大東出版社、1980年

『禅門諸祖師偈頌』の文献的考察』、田中良昭博士古稀記念論集刊行会編『禅学研究の諸相』、大東出版社、2003年

『五山版中国禅籍叢刊 詩文・詩話』第十一巻、臨川書店、2014年

『五山版中国禅籍叢刊 語録1』第六巻、臨川書店、2016年

篠原寿雄・田中良昭

『敦煌仏典と禅』、大東出版社、1980年

白石虎月

『続禅宗編年史』、酒井書店、1943年

滋賀高義

『唐代釈教文選訳注』、朋友書店、1998年

末木文美士

「奈良時代の禪」、『禪文化研究所紀要』15、1988年

『日本仏教思想史論考』、大蔵出版、1993年

菅沼晃

「新仏教運動と哲学館一境野黄洋と高嶋米峰を中心に」、『印度学仏教学研究』49-1、2000年

「新仏教運動の旗手たち一境野黄洋と高嶋米峰の理性主義・常識主義」、『大法輪』69-1、2002年

鈴木哲雄

「荷沢神会論」、『仏教史学』14-4。1969年

鈴木大拙

『楞伽師資記』とその内容概観』、『大谷学報』12-3、1931年

『燉煌出土荷沢神会禅師語録』、森江書店、1934年

『燉煌出土六祖壇経』、同上

『興聖寺本六祖壇経』、同上

『燉煌出土荷沢神会禅師語録解説及目次・燉煌出土六祖壇経解説及目次・興聖寺本六祖壇経解説及目次』、同上

『燉煌出土少室逸書』、私家版、1935年

「達磨観心論(破相論)四本対校(上)(下)」、『大谷学報』15-4、16-2、1934・1935年

「龍谷大学付属図書館蔵敦煌本「菩提達磨観門法大乘法論」、殊に其中の「宗修心要論」に就きて」、『大谷学報』16-1、1935年

「神会和尚の『壇語』と考ふべき敦煌出土本につきて」、『大谷学報』16-4、1935年

『校刊少室逸書及解説』、安宅佛教文庫、1936年

『校刊少室逸書及解説附録：達磨の禅法と思想及其他』、同上

「敦煌出土達磨和尚絶観論につきて」、『仏教研究』1-1、1937年

『韶州曹溪山六祖師壇経』、梵文仏典刊行会、1940年

『禅思想史研究 第二』、岩波書店、1951年(同書店、2000年四版)

『禅思想史研究 第三』、岩波書店、1968年(同書店、2000年四版)

関靖

「金沢文庫の禅籍に就いて」、野口信二編『積翠先生華甲寿記念論纂』、同記念会、1942年

関口真大

『達磨大師の研究』、彰国社、1957年(春秋社、1969年再版)

「禅宗の発生」、福井博士頌寿記念論文集刊行会編『東洋思想論集：福井博士頌寿記念』、同刊行会、1960年

「南宗と南宗禅」、『印度学仏教学研究』10-2、1962年

『禅宗思想史』、山喜房佛書林、1964年

『達磨の研究』、岩波書店、1967年

仙石景章

『観心論』の思想と特質について、『宗学研究』23、1981年

高橋秀栄

鎌倉初期における禅宗の性格(序)―日本達磨宗の禅の性格、『宗学研究』13、1971年

竹内弘道

「荷沢神会考―『神会語録』の成立について」、『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』15、1981年

「荷沢神会考―『金剛経』の依用をめぐって」、『宗学研究』24、1982年

田中良昭

「大照禅師普寂について」、『印度学仏教学研究』16-1、1967年

「イギリス・フランス留学記〈報告〉」、『駒沢大学仏教学部論集』3、1972年

「敦煌禅宗文献(漢文)研究概史」、『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』5、1982年

『敦煌禅宗文献の研究』、大東出版社、1983年

「敦煌の禅籍」、『禅学研究入門』、大東出版社、1994年(同出版社、2006年改訂版)

「私の敦煌学」、『禅研究所紀要』24、1996年

「禅宗」、『中国仏教研究入門』、大蔵出版、2006年

『宝林伝訳注』、内山書店、2007年

『敦煌禅宗文献の研究 第二』、大東出版社、2009年

『敦煌Ⅱ』大乘仏典〈中国・日本篇〉第十一卷、中央公論社、1991年

田中良昭・程正

『敦煌禅宗文献分類目録』、大東出版社、2014年

程正

「敦煌文献「某僧與法師問答」(S191)の内容について」、『印度学仏教学研究』57-1、2008年

天台宗宗典刊行会

『伝教大師全集』第二、同刊行会、1912年

天台宗典編纂所

『続天台宗全書』密教3、春秋社、1990年

唐代語録研究班

『神会の語録』、禅文化研究所、2006年

常盤大定

「見性の思想的考察―達磨大師「血脈論」・「悟性論」・「観心論」を中心として」、『哲学』11、1933年

『宝林伝の研究』、東方文化学院東京研究所、1934年(国書刊行会、1973年再版)

秃氏祐祥

「少室六門集に就て」、『龍谷学報』309、1934年

徳重寛道

『神会語録』の成立に関する一考察、『印度哲学仏教学』10、1995年

中西久味

『『俄藏敦煌文献』 禅籍資料初探』、『比較宗教思想研究』 5、2005 年

中村信幸

「神会語録の疑問文」、『曹洞宗研究員研究紀』 10、1978 年

西口芳男

「敦煌写本七種対照『観心論』」、『禅学研究』 74、1996 年

西田竜雄

『西夏王国の言語と文化』、岩波書店、1997 年

「西夏語研究の新領域」、『東方学』 104、2002 年

忽滑谷快天

『禅学思想史』 上下巻、玄黄社、1923・25 年（名著刊行会、1979 年再版。中国語訳：朱謙之訳

『中国禅学思想史』、上海古籍出版社、1994 年（同 2002 年再版）

前田恵学

「日本における近代仏教学」、『禅研究所紀要』 4・5、1975 年

牧田諦亮

「宝誌和尚攷」、『中国近世仏教史研究』 牧田諦亮著作集第四巻、臨川書店、2015 年

松本文三郎

『達磨』、図書刊行会、1911 年（第一書房、1942 年改訂版）

『金剛経と六祖壇経の研究』、貝葉書院、1913 年

『仏典乃研究』、丙午出版社、1914 年

『『六祖壇経』の書志学的研究(上)(下)』、『禅学研究』 17・18、1932 年

水野弘元

「禅宗成立以前のシナの禅定思想史序説」、『駒沢大学研究紀要』 15、1957 年

柳田聖山

「灯史の系譜」、『日本仏教学協会年報』 19、1953 年

「玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌写本第 4478 号の紹介」、『仏教史学』 7-3、1958 年

「禅門経について」、塚本博士頌寿記念会編『仏教史学論集：塚本博士頌寿記念』、同記念会、1961 年

「祖師禅の源と流」、『印度学仏教学研究』 10-1、1962 年

「伝法宝紀とその作者—ペリオ 3559 号文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その一」、『禅学研究』 53、1963 年

「大乘戒経としての六祖壇経」、『印度学仏教学研究』 12-1、1964 年

「菩提達摩二入四行論の資料価値」、『印度学仏教学研究』 15-1、1966 年

『初期禅宗史書の研究』、法蔵館、1967 年（同 2000 年再版、柳田聖山集第六巻に収録）

『達摩の語録』 禅の語録 1、筑摩書房、1969 年

- 「禅思想の形成—『伝法宝紀』と『楞伽師資記』」、『花園大学研究紀要』1、1970年
- 『初期の禅史Ⅰ』禅の語録2、筑摩書房、1971年
- 『禅学叢書之二』、中文出版社、1974年
- 『胡適禅学案』、中文出版社、1975年
- 『初期の禅史Ⅱ』禅の語録3、築摩書店、1976年
- 「語録の歴史—禅文献の成立史的研究」、『東方学報』57、1985年
- 『禅仏教の研究』柳田聖山集第一巻、法蔵館、1999年
- 『禅文献の研究 上』柳田聖山集第二巻、法蔵館、2001年
- 『禅文献の研究 下』柳田聖山集第三巻、法蔵館、2006年
- 『臨濟録の研究』柳田聖山集第四巻、法蔵館、2007年
- 山崎宏
- 『隋唐仏教史の研究』、法蔵館、1967年
- 矢吹慶輝
- 『シュタイン氏蒐集燉煌地方出古写仏典ロードグラフ解説目録』、宗教大学、1917年(『宗教研究』
〈2-5・6・8、1917-1918年〉に掲載)
- 『英国博物館所蔵スタイン写本写真帖』、啓明会事務所、1924年
- 『英国博物館蔵燉煌出土古写仏典(ロードグラフ)略目』、啓明会、1925年
- 『鳴沙余韻図録篇：燉煌出土未伝古逸仏典開宝』、岩波書店、1930年(臨川書店、1980年再版)
- 『鳴沙余韻解説篇：燉煌出土未伝古逸仏典開宝』、岩波書店、1933年(臨川書店、1980年再版)
- 吉田豊
- 「ソグド語訳『楞伽師資記』と関連する問題について」、『東方学』133、2017年
- 中世禅籍叢刊編集委員会
- 『中世禅籍叢刊 達磨宗』第三巻、臨川書店、2015年

【中文】

陳祚龍

「杜朏不是朏法師」、『中華仏教文化史散策』4、新文豊出版公司、1986年

葛兆光

『中国禅思想史：從六世紀到九世紀』、北京大学出版社、1995年(上海古籍出版社、2016年増訂版)

韓伝強

『胡適之禅宗考論』、商務印書館、2018年

何劍平

「宝志詩歌作品真偽及創作年代考辨」、『中国俗文化研究』2004年00期、2004年

洪修平

『禪宗思想的形成与發展』、江蘇古籍出版社、1992年(同出版社、2000年修訂版)

胡適

『神会和尚遺集』、亜東図書館、1930年(中央研究院胡適紀念館、1968年再版)

「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』29、1957年

「神会和尚語錄的第三個敦煌写本—『南陽和尚問答雜徵義：劉澄集』」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』外篇第四種、1960年

胡忠兵

「唐代衛尉寺職能考述」、『芸術化技』2016年第10期、2016年

賈晋華

『古典禪研究：中唐至五代禪宗發展新探』修訂版、上海人民出版社、2013年(齋藤智寬監訳『古典禪研究：中唐より五代に至る禪宗の發展についての新研究』、汲古書院、2017年)

金九經

『校刊唐写本楞伽師資記』薑園叢書第二卷、出版不明、1933年

『校刊歷代法寶記』薑園叢書第三卷、出版不明、1933年

『校刊安心寺本達摩大師觀心論・校刊大乘開心顯性頓悟真宗論』薑園叢書第一卷、出版不明、1934年

江燦騰

『中国近代仏教思想的諍辯与發展』、南天書局、1998年

「薪火相伝—胡適初期禅学史研究の最新動態及其作為跨世紀現代性宗教学術研究典範的伝承史(1925-2011)再確認」、『成大宗教与文化學報』17、2011年

蒙文通

「中国禅学考」、『内学』年刊第一輯、支那内学院、1924年

冉雲華

「宗密伝法世系の再探討」、『中華仏学學報』1、1987年

『中国禅学研究論集』、東初出版社、1990年

「『唐故招聖寺大德慧堅禅師碑』考」、『中華仏学學報』7、1994年

荣新江

「敦煌藏經の性質及其封閉原因」、『敦煌吐魯蕃研究』2、1996年

「敦煌本禅宗灯史殘卷拾遺」、白化文編『周紹良先生欣開九秩慶寿文集』、中華書局、1997年

孫昌武等

『祖堂集』上下冊、中華書局、2007年

温玉成

「記新出土的荷沢大師神会塔銘」、『世界宗教研究』1984年第2期、1984年

楊曾文

『神会和尚禅話錄』、中華書局、1996年(同書店、2007年再版)

『唐東都同德寺故大德方便和尚塔銘并序』の發見及學術價值』、『仏学研究』2000年00期、2000年
『新版・敦煌新本六祖壇經』、上海古籍出版社、1993年(宗教文化出版社、2001年)

『唐五代禪宗史』、中国社会科学出版社、1999年

印順

『中国禪宗史』、正聞出版社、1971年。(日本語訳：伊吹敦訳『中国禪宗史：禪思想の誕生』、山
喜房仏書林、1997年)

張子開

「是“集”“撰”還是“述”唐五代禪宗的著作觀念—以敦煌写本『楞伽師資記』為考察中心」、
『敦煌仏教与禪宗：學術討論会文集』、三秦出版社、2007年

【欧文】

Bernard Faure

The Will to Orthodoxy : A Critical Genealogy of Northern Chan Buddhism, Stanford University
Press,1997. (中国語訳：蔣海怒訳『正統性的意欲：北宗禪之批判系譜』、上海古籍出版社、2010年)

Édouard Chavannes

Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental, Oxford :
Imprimerie de l'Université, 1913.

Jacques Gernet

Entretiens du maître dhyāna Chen-houei du Ho-tsö (668-760), Publications de l'école française
d'Extrême-Orient, v. 31. Hanoi. 1949.

John R. McRae

The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism, University of Hawaii Press, 1986.
(中国語訳：韓伝強訳『北宗禪与早期禪宗的形成』、上海古籍出版社、2015年)

Paul Demiéville

Le Concile de Lhasa: Presses universitaires de France,1952.(中国語訳：耿昇訳『吐蕃僧諍記』、甘
肅人民出版社、1984年。後に2001年に西藏人民出版社より再版)

Deux documents de Touen-houang sur le Dhyāna chinois, 塚本博士頌寿記念会編『塚本博士頌寿記
念：仏教史学論集』、同記念会、1961年(日本語訳、林信明訳『『神会語録』とチベット宗論—
中国禪に関する二つの敦煌資料』、『禅学研究』60、1981年)